

CIEC Newsletter

お知らせ

<2009PC カンファレンス>

2009PC カンファレンスは愛媛です！

開催日時 2009年8月9日(日)～11日(火)

開催場所 愛媛大学

※2009PCC 分科会レポート募集要項はE-mailでご案内いたします。

(12月末頃、公式サイトを公開予定です)

◇PC カンファレンス北海道 2008

【テーマ】 情報技術を利用した教育におけるタテの絆

【日時】 2008年11月15日(土)13:00～16日(日)12:45

【会場】 室蘭工業大学 大学会館 (北海道室蘭市水元町 27-1)

【公式サイト】 <http://www.hokkaido.seikyoin.ne.jp/pcch/2008/>



◇2008PC カンファレンス九州 in 佐賀大学

【テーマ】 eラーニングで変わる学校教育～小学校から大学教育まで～

【日時】 2008年11月22日(土)13:00～23日(日)12:00

【会場】 佐賀大学 理工学部 低平地研究センター, 大学院棟(佐賀市本庄町1番地)

【公式サイト】 http://kyushu.seikyoin.ne.jp/scoop/news/pc_conference.html

CONTENTS

<CIEC 研究会報告>

- ・第75回研究会報告 2
- ・第76回研究会報告 3
- ・北海道支部 第2回研究会報告 5

<2008PC カンファレンス>

- ・開催報告 7

<CIEC からのお知らせ>

- ・2009PCC のお知らせ 9
- ・CIEC 第77回研究会開催案内
- ・PC カンファレンス北海道 2008 開催案内
- ・2008PC カンファレンス九州 in 佐賀大学開催案内
- ・CIEC 活動日誌

CIEC 会員状況

(2008年10月1日)

<個人会員 889名>

教員 658, 大学職員 18,
院生 46, 学生 7,
生協職員 83, 企業 30,
研究員 7, その他 40

<団体会員 93団体>

企業 28, 生協 58,
大学 2, 高校 1,
法人 4

CIEC ニュースレター

2008年10月1日

発行：CIEC (コンピュータ利用教育協議会)

〒166-8532 東京都杉並区和田 3-30-22 大学生協会館

TEL 03-5307-1195 FAX 03-5307-1180

e-mail jim@ciec.or.jp URL <http://www.ciec.or.jp/>

CIEC 研究会報告

(敬称略)

《CIEC 第 75 回研究会報告》

【小中高部会主催】

テーマ なぜ協調自律学習は必要か
 ー変動社会における生涯学習の実現を目指してー
 日時 2008年6月22日(日) 13:00～17:00
 会場 京都女子高等学校
 講師 西之園 晴夫(NPO 法人学習開発研究所代表)
 齊尾 恭子(大阪国際大和田高等学校)
 望月 紫帆(NPO 法人学習開発研究所所員)
 司会 大橋 真也(千葉県立東葛飾高等学校)
 参加者 25名

小中高部会の主催する研究会は、本年度、2008PCカンファレンスのテーマ「創発する学び」と関連させて実施していくことになった。このたびは、3月実施した第73回研究会のテーマ「教える授業から、学ばせる授業へ」に続き、「創発する学び」をより具体的な授業実践につなげたいと考えている。そこで、多様化する学習者に対応し他の人と協力しながら学ぶことを実践・指導してこられた西之園晴夫先生(NPO 法人学習開発研究所代表)をお招きし「協調自律学習」について講演していただき、その後、参加者によるワークショップとしてチーム学習の体験とあわせて、この研究会がお互い学びあいながら「創発」にむかう場になることを目指した。

まず前半の部として、西之園晴夫先生(NPO 法人学習開発研究所代表)より、「なぜ協調自律学習は必要か」変動社会における生涯学習の実現を目指してという演題で講演していただいた。

先生の講演ではおもに欧州の教育モデルを参考にしながら、授業研究を始める前に、授業について3つのタイプがあり、

(1) 授業についての理論は講釈できるが、自分の授業の設計も評価もできない＝評論家タイプ (2) 授業の実施は格段に上手だがそれを記述したり説明したりできない＝職人的熟練者タイプ (3) 授業を計画的合理的に改善できる方法論をもち、自分の授業の組み立て方を説明できるだけでなく、新しい授業を開発できる＝専門的熟練者タイプがある。そこで、これから実現したい授業は、まず低所得者へ無償の高等教育を提唱できる枠組みを作り多人数の授業でありながら一人一人の受講者が能力を最大限発揮でき、学習を通じて協調してお互いの能力を最大限伸ばせる授業、つまり価値の多義性と能力の多様性によって自律して学習できる個性的な授業の展開が大切であり、このことは今まで行われてきた理論専攻型の授業ではなく、他で実施されていない新しい授業の開発研究を行うことが、これからの高等教育を展開するうえでは大事であると言われていた。現在、特に高等教育が当面している問題として、まず高等教育における発達段階の問題があげられる。理想的な発達段階として、エリート教育からマス教育そしてユニバーサル教育へ系統化されていくが、残念ながらユニバーサル化への展望が欠落したことがあげられる。このことは知識基盤社会が求めている知識労働の質が低下し、同時に格差の問題にも繋がっている。近年は格差社会の問題があげられ、格差をもたらず負の効果、例えば犯罪、失業、社会不安の上昇や社会福祉費の高騰などがあげられ、教育でも国公立大学や私立大学の授業料・入学金が年々上昇してお

り、ひとりに対する負担額も世界主要国の中でも一番高いとされている。

これらを打破するためには、低所得者層への無償による高等教育の提供であり、社会的経済的出身階層に関係なくひとりひとりの国民が能力を最大限に発揮できる高等教育が求められる。また、学びを通じて協調してお互いの能力を最大限に伸ばせるような教育によって協調と競争のバランスを保つことになる。(残念ながら日本では難しい問題もあるが)

そこで、インターネットを利用した遠隔授業による大学の開設である。例えば、スウェーデンの Netuniversity ではスウェーデン国内の全体学生数 340,000 人に対しネット大学の全学生数は 70,000 人と全体の 20%を占めているのである。教員数も 15～20 名程度である。教材も大学で共同開発され、オンラインで提供する仕組みをしている。授業の内容も日本での教養教育ではなく職業教育に力点を置いているのも特徴のひとつである。また、デンマークでは貧困家庭でのインターネットアクセスできる割合も全体の 70%となっている。

こうしたことから、欧州では従来の大学からインターネットを利用した遠隔授業による大学がクローズアップされている。

次に授業過程を考えた場合、従来の PDS (Plan-Do-See) では上手くいかない。そこで統合と分析に区分される。前者はメタファー(例えば・・)からイメージされたものを解釈して、モデル化され改善された授業となる。一方、後者は質的量的分析を行う分析概念を経て、モデル化される。

前者のメタファーの事例として、学習の変容、チーム学習の診断、遠隔授業、そして大学教員同士での共同研究などがあげられる。授業展開のイメージは、あるテーマに基づいて協力しながら情報収集を行い、チーム内で討議をした結果を発表し、報告書にまとめる。チームで協力しながら共有できるテーマについての問題解決を図りながら、個人の「学ぶ力」を培う学習であり、教えることを極力抑えることが可能になる。これが協調自律学習のモデルである。これらの授業を設計する場合、MACETO モデルがあり、学習事象によって、M(意味)A(活動)C(内容)E(環境)T(道具)O(成果)のサイクルを生む。つまり仮説として学習者の内的条件を整えることによって、外的条件が十分でない場合でもその困難を克服して協調自律学習を実現できることになる。しかしこの場合でも課題設定のおいても自由化するとうまくいくチームとそうでないとの差が大きくなること、バラバラのテーマでは発表の時に討議できないまたは深まらないといった失敗例もある。したがってテーマ設定をする場合は、誰もがよく知っているか、誰も知らないテーマにすることが望ましく、また誰かが特定テーマに精通しているものがいれば、その人が中心となり、他の人はフォロワーになることができる。さらにこれらを行う場合には前提条件をそろえると参加しやすくなる。

例えば、「情報の用語集を作成」することをイメージして頂きたい。メタファーを用いた場合、作業を始めるにあたってスタッフの自己紹介から始めると思うが、方法として「アイスブレイキング」を用いて名前を覚えながら作業の分担を行い、各分担したチームがそれぞれの情報収集を行いながら、まとめとして各チームの情報を統合し、最後に用語集が完成する。また完成した用語集について試用と用語のテストを経てから完成となる。つまり、この考えを推進するために「タコ壺の授業研究」を進めることになる。現在、日本を取り巻く諸外国を見渡しても、自分の授業の問題は解決できず、さらに日本の大学の授業料は世界一高額なため教育生産性が低いことを考えると、まだ誰も実現していない授業を開発する

ことである。これこそが協調自律学習が必要となる要因であることを最後にまとめていただいた。

後半の部では、ワークショップとして参加者全員が実際にチーム学習を経験することになった。現在、高等学校の現場で実際にチーム学習の授業を行われている、大阪国際大和田高等学校の齋尾恭子先生を講師に、ワークショップをおこなった。始めに、チーム学習について理解するために、高校の授業で行われている実践例から、中・高等学校で取り組みやすい内容を想定してチーム学習の枠組みについて紹介された。

チーム学習の枠組みとして、(1) コミュニケーションタイプ・インベントリに基づくチーム編成 (2) 全員が参加する役割分担の明確化 (3) 進行はチームごとに生徒が行うことになる。

特に (3) についてはチームごとにメンバーが知恵を出し合い課題に取り組むことになる。

なお、コミュニケーションスタイルインベントリの著作源は株式会社コーチ A に所属している。今回のワークショップでは、コミュニケーションスタイルインベントリテストの簡易版の掲載許可を得ている学習ガイドブック『教育の技術と方法』(西之園晴夫編著)を用いている。

このチーム学習を行うねらいとしては、基本的な学習スキル(コミュニケーションスキル)の習得である。つまり、学びの喜びを体感することによって自己の肯定感が広がることである。なお、ここでの学習スキルとは、(1) 問題をみつけるスキル (2) 聴く読むスキル (3) 調べる整理するスキル (4) 吟味検討するスキル (5) まとめる書くスキル (6) 覚えるスキル (7) 表現するスキルと分類されるがこれらをまとめると「考えて発表するスキル」の習得である。

その後、授業の流れ(教師の解説、チーム学習、教師のまとめ)を説明し、参加者はあらかじめ提示されていたコミュニケーションインベントリテスト簡易版(コミュニケーションタイプの自己チェック)の結果で各チーム(1チーム5名程度)に分かれてチーム学習をおこなった。

チーム編成後、自己紹介をした後それぞれの役割分担を決め、あらかじめ渡された「指令票」にしたがって進められた。

内容はテーマ(教員1年目の思い出など)について、次の6要素を入れて筋立てて説明することがねらいである。はじめに「いつ(時間)」「どこで(場所)」「だれが(人物)」「なにを(対象)」「なぜ(理由)」「どのように(行為)」の6要素にテーマに基づくキーワードを列挙していき、さらにそれらのキーワードをひとつに抜き出しながら、最後には文章(作文)を作成する論理力の基礎を深める問題であった。

参加者は、それぞれグループで与えられた時間内でそれぞれのテーマにあうキーワードを書き、それを文章化してチーム内で発表していた。それぞれのチームでは役割分担が明確化されており、全員がチームに参加する取り組みとなっていた。

約1時間チームで取り組んだ後に全体発表として各チームの取組内容の発表があった。実際にチーム学習を経験しての感想も述べられ、それに対して、質問や助言もあった。

今回、「創発する学び」のテーマで研究会を行ったが、生徒や学生の学びを引き出す方法として西之園先生の「協調自律学習」やワークショップで実践された齋尾先生の「チーム学習」の展開について、今後の授業を行ううえで大きなヒントとアイデアを提供されたと思う。今回の参加者は小中高校での先生方が多かったが、この研究会で得たものを学校現場に持ち帰って実践してみたいひとりとなった。ありがとうございました。

(文責:石谷 正)

《CIEC 第76回研究会報告》

【研究委員会主催】

テーマ 学校教育における、電子メールによる教育相談
日時 2008年7月5日(土)13:00~15:30
会場 大学生協杉並会館 202・203 会議室
講師 田村 毅(東京学芸大学/東京いのちの電話理事)
司会 石川 祥一(実践女子大学)
参加者 15名

インターネットを利用した心理支援を長年行い、その豊富な経験をもとに「NHK ひきこもりサポートキャンペーン」や「東京都ひきこもりサポートネット」、「いのちの電話」などの活動を積極的に行われている田村 毅氏より、「学校教育における、電子メールによる教育相談」とのテーマでご報告していただいた。

相談活動は、相手となんらかのメッセージを交わしてやりとりをするコミュニケーション活動で、基本は面接相談であるが、様々なメディアを使った手段が考えられる。さらに間接的なものとして、電話相談やメール相談などがある。電話相談は、イギリスで1953年に牧師のチャド・パーラー氏が電話相談を始めたのが原点で、聖書の福音書の中の「よきサマリヤ人」に由来する「サマリタンズ(Samaritans)」という電話組織が作られ、次第に普及し、専門家も含めボランティアが協力するようになり「良き友になる(befriending)」ことが、自殺予防につながることから、世界中に広がったものとのこと。

日本でも1971年に東京で「いのちの電話」が始まり全国に展開していった。現在では、50カ所の支部があり、ボランティアの相談員が、必要な研修を受けて参加し、自殺予防や危機介入を目的として活動している。

電話相談が始まった時には、賛否が分かれ、効果が疑問であり、リスクが高いとも考えられていたが、現在では認められ、活動の幅も広がっている。また、ここ数年、自殺者数が年間3万人を超えていることもあって、様々な自殺対策が認められてきている。それまでは、自殺は、社会の影の部分として、あるいは、心が弱い人が原因の特殊な部分ともとらえられ、行政機関もあまり積極的ではなかったと報告された。

伝統的な精神医学は、病院が中心であって、科学的な方法で治療を行うモデルが一般的であるが、田村氏は、研修医の頃からいのちの電話による相談に関わり、社会の中に自ら向いて精神的な問題を解決するという活動されている。

また、田村氏は、1997年ぐらいより、インターネットでの新しい取り組みを始め、パソコン通信からインターネットに切り替わってきたころ、実験段階的に電子メールを利用した相談を行う活動において多くの方からの相談があったとのこと。次第に相談が増加してきたため、メール相談で、時間的に対応が難しくなり、メーリングリストのよる相談に切り替えたとのこと。

メーリングリストのよる相談手法は、心理学では、グループを使った相談という手法があり、同じような悩みを抱えた方が集まり乗り越えていく手法であるが、たとえば、アルコール中毒の方が集まり、それを乗り越えていくようなことはよく行われているものと同様の手法で、同じ立場の人の言葉はそれぞれの心に響き、相互支援が成立する。

しかし、メーリングリストによる相談は、結果的に、余り成功したとは言えないとのこと。心理的には、普段言えないことを記述できる。自分自身が隠している感情を表現でき、心の中のわだかまりを吐き出すことで、次の一步に進むことができ有効な手段であるが、メーリングリストでは、逆に作用してしまうことがある。

メーリングリストでのやりとりが非常にうまくいく場合には、相互支援によってよりよい方向に働くが、誹謗中傷合戦になってしまうと收拾がつかなくなる。書き言葉は、話し言葉以上に人の心に直接作用し、発言された方が何気なく発した言葉であっても、受取る側の受け取り方で蜂の巣ついた状態になってしまう。このような場合には、一度、メーリングリストを閉鎖して、また再開するということを繰り返していたとのこと。

そのころ、NHK ひきこもりサポートキャンペーンが2002年NHK開局50周年の事業として、「環境問題」や「ひきこもり」などいくつかのテーマについてインターネットを利用して行うこととなり、田村氏も参加されたとのこと。

主に、「ひきこもり」とはどのような状態かという情報提供であったが、公的機関がひきこもりについて大規模にサポートするにはこれが初めてではないかとのこと。

いのちの電話でもインターネットを利用したメール相談においても組織のなかでも当初は賛否両論があった。やってみようという意見も多い反面、たとえば、緊急度が高い問題でもなにも対応がとれないとか、メール相談に依存し、さらに「ひきこもり」を悪化させるなどかえって危険であるという否定的な意見も多い。

そのため、ハッカー対策、セキュリティへの対応、「ひきこもり」の情報提供を行ったことより被害を受けたなどの対策のための弁護士のサポートなども検討し、分厚い想定問答集のようなマニュアルも作成して活動を始めたが、結果的にあまり問題はおきなかった。

その後、「東京都ひきこもりサポートネット」と言うかたちで、東京学芸大学の田村氏研究室で活動をつづけられているとのこと。



メールによる相談では、本人からの相談が多いことが特徴で、本人からの相談が60%ぐらい、親からの相談が14%、兄弟からの相談が17%ぐらいの割合である。東京からの相談は、4割で、その他全国からや海外からも相談がある。相談には、相談者は登録が必要でIDを発行するが、身元は確認しないため、匿名で相談ができる、また、相談のメールが届いてから、10日以内ぐらいには返事を出し、複数回の相談も可能であるとのこと。

このメール相談の返信文を作成する相談員は、30人ぐらいで、医師や専門家ではないが、人生経験の豊かな方である。専門の研修を受けた相談員で、2年以上の電話相談経験者が「ひきこもり」やネット相談の基礎知識、相談のスタンスなどの講義、パソコンの操作、返信文の作成、メンバーとの検討体制について研修を受けている。相談員として、認定され

た後も、継続的に研修を続け、返信文は、それぞれの担当者が作成したものを複数のメンバーで読み合っけて検討し、必要に応じて、チェックを行ってから返信する。幸いなことにこれまで、返信でのトラブルは出てきていないとのこと。

相談の文は、1500文字ぐらいで、書き込めるようにしてある。メールでの相談の特徴で、話し言葉でなく、メールをやりとりするに時間がかかるところがあり、文字として残ってしまう。慎重にならざるをえない面もあり、相談の件数は、月に120から160件程度で、相談員の体制は、30人、週5日で10:00から17:00で、田村氏は、スーパーバイザーとして関わられている。

このような相談活動では、問題を抱えている人と困っている人が同一人物の場合と異なる場合がある。通常、大人で自分が困っていれば、自から相談に行くが、子供の場合には、本人も困っているか、あるいは、本人は、困っていない場合もあり、その周りの人や家族などが困っているケースも多く、周りの人が相談に来ることが多い。電話相談においても家族からの相談が多い。クリニックでの通常の面接相談では、圧倒的に家族からの相談が多い。これは、「ひきこもり」の本人が、クリニックに相談に来られるのであれば、既に「ひきこもり」ではないからである。

「ひきこもり」の概念は、厚生労働省によれば「社会的な参加の場がせばまり、就労や就学など自宅以外での生活の場が長期にわたって失われている状態で、単一の疾患や障害の概念ではない」という新たな概念である。精神病や疾患ではない。鬱病であったり、統合失調症や発達障害、人格障害などの診断名がつくものがあるが、これらの障害ではなく、「ひきこもり」は、「関係性の障害」とであると説明された。

また、田村氏は、『社会的ひきこもり (PHP新書、1998年)』などの著者の精神科医の齊藤環氏の「ひきこもりシステム」についても紹介された。これによれば、「健全なシステム」では、個人、家族、社会という三つの円が、一点で接点をもっているもので、この接点とはコミュニケーションがあるという意味であり、これに対して「ひきこもりシステム」は、接点なくなり、三つの円はそれぞれ接点をもつことなく、コミュニケーションがもてない状態とのことである。

「ひきこもりシステム」の解消は、三つの円が接点をもつ「健全なシステム」を実現することであり、具体的には本人と家族、社会との間のコミュニケーションを回復すること。ところで、この場合のコミュニケーションは、単に話し合いをしているということではなく、相互的な理解がなされる状態があるかどうか重要である。

現代ではアルコール依存症患者が、自分の力だけで立ち直ろうとする努力は、非常に難しいとされているが、同様に一人でこの「ひきこもりシステム」から抜け出すことは難しく、三つの円が接点をもたない「ひきこもりシステム」の解消は、まず本人との間の接点をつくるよう努力することであり、当然本人にとっては「他人からの介入」ということになる。「他人からの介入」を本人が受入れることを決意できれば、事実上、円と円との間の接点が出来たことになる。そこで問われるのはコミュニケーションの質であるそうである。

いのちの電話でも同様の傾向であるが「ひきこもり」相談は、本人からの相談が多い。また、メールを使った相談では、若い人が多い。10代もいるが多いのは、20才ぐらいから30才前半ぐらいである。インターネットを相談の手段として使いやすい年代が多いということになる。面接、電話、メール、いろいろな手段があるが、自分の事を伝えたいということをして

伝えやすいかどうかということになる。

時代が変わり、インターネットを好む世代が高齢者になったときには、別の年齢分布になり、異なる傾向になると思われる。「ひきこもり」の期間は様々だが、5年、10年という方の割合も多いので、やはり、社会問題になっているのだと思うと言われた。

また、約半数の人が、過去に相談歴があり、医療機関やカウンセラー、支援団体などに相談している。相談回数は、1回きりの場合が最も多い。情報提供によって事足りれば、1回で相談は終了するが、最も多い場合は、100回以上もあり、メール相談そのものが依存症に関与している可能性も考えられるので、いい事なのかどうかわからない。また、家族からの相談の場合には、1回きりの相談が多いが、本人からの相談の場合には、複数回になることが多いとのことであった。

次に、相談内容にもよるが、相談内容を便宜的に「具体的な質問」、「漠然とした質問」、「何も質問しない」の3つに分けるとすると、「具体的な質問」とは、求めるものが明確で、具体的であるもので、たとえば、どのような相談機関にいったらよいか、朝型の生活に切り替えるにはどうしたらよいか強く論じたほうがよいかほっといたらよいかなどであり、「漠然とした質問」とは、自分や家族の状況を伝えて、どうしたらよいかわからず、非特異的にアドバイスを求めるもので、たとえば、「ひきこもり」から抜け出すにはどうしたらよいか、どうやって生きていけばよいか、どうしたら友人ができるかなどで、「何も質問しない」とは、つぶやきや単に自分の気持ちを伝えるもので特別の回答を求めないもの、たとえば、「相談してよいかわかりませんが聞いてください」、「なんの役にも立たない単なる暇つぶしです」、「聞いてくれる人がいて少しは楽になりました」などである。

「ひきこもり」は、関係性の障害でそれを回復させればよいのであるが、自信のなさ、過去にいじめられたことがある、人と関わり合って傷ついたことがある場合には、メールによる相談は、人と会わなくてよいので、低侵略性である。人と会って嫌われたらどうしようなどというリスクを避けられ、継続して相談関係を保ちながら、次第に、メールから、対面相談、医療機関への受診や、家族との関係、社会との関係へと現実の社会との関わりレベルを上げていくという方法がとれる。

メールによる相談の特徴として、「書き言葉」による相談である。「話し言葉」と「書き言葉」は、本質的にかなり異なるものであり、非言語メッセージが伝わらないために客観的な情報が欠如し、主観的な情報であること。

相談者の感情を文字化することで、潜在的な心の葛藤を外在化させることに有効である反面、言葉が明確な文字として直接伝わるために、表現がきつくなってしまい、文字に書いていることしか伝わらないために誤解を招くことがあること。

また、いのちの電話では、相談員の性別がわかるため、性的な相談が多いが、メール相談では、相談員の性別など全くわからないので、この種の相談は非常に少ないこと。

通常の相談手段を使えない人の利用として、障害者、遠隔地在住者、不登校、ひきこもり、社会的に孤立しやすい子育て中の女性からの相談も可能であることであった。

最近、起きているいくつかの事件を見ると、本人だけではなくなかなか乗り切れない問題や、教育現場においても、多くの問題が複雑化、多様化し、また、人々の孤立化も進んでいるようにも思われることから、今回の研究会は企画された。

その結果、電子メールを用いた相談が、ある程度有効な方法として、その相談の現状を知り「どのように対応し」、「どこまで対応できるのか」をお聞きしたことで、教育を行う側が、たとえセラピストやカウンセラーでなくても、問題を抱えている側が、その気持ちをメールの文章にする段階で、通常の面接による相談では、なかなか相談しにくい場合や未分化な漠然とした相談であっても相談が可能であるばかりか、体験を言語化して記述することによって自己回復できる場合があることなどを理解することができ、一般の教育技法の中にも活かすことができるのではないかと考えられた。

(文責：鳥居 隆司)

《CIEC 北海道支部 第2回研究会報告》

テーマ iPod の教育への応用を考える
日時 2008年7月19日(土) 10:20~15:00
会場 北海道情報大学 札幌サテライト教室
司会 曾我 聡起 (北海道文教大学)
参加者 33名

CIEC 北海道支部として二回目の研究会を行いました。今回は、様々な現場で iPod を活用している事例報告とアップルジャパン社によるハンズオンセミナーなど、盛りだくさんな内容となりました。遠くは新潟からの来場者があったり、大学教員、学生のほか小中高校の教員なども参加するなど CIECらしい雰囲気の集いとなりました。

■ プログラム

10:20 - 12:00

[講演]

「Learn Anytime! Anywhere!」

坂本 憲志 (アップルジャパン株式会社 東日本営業部長)

「日本語コースにおける iPod 活用の実践報告」

遠藤 仁美 (Associate Professor of the Practice / Japanese

Program Coordinator, Duke University)

「開かれた学校を目指して - iPod の活用を探りながら -」

佐藤 祈 (三笠市立新幌内小学校 教頭)

13:10 - 13:30

「学校環境で Podcast コンテンツを速やかに配信する」

曾我 聡起 (北海道文教大学)

13:30 - 15:40

[ワークショップ]

「Mac で作る Podcast 入門」

アップルジャパン株式会社

森夏節先生 (CIEC 北海道支部長, 酪農学園大学) の挨拶の後、坂本 憲志さんよりご講演頂いた。坂本さんは、IT の世界におけるイノベーションが、教育の対象となる生徒や学生、学習環境にもたらした変化を理解した上で、Podcastなどを組み合わせた学習システムのあり方を示した。



Council for Improvement of Education through Computers

「学校の先生はどうだろう。現代の学習環境は変わっているのだろうか。ネットワーク環境は大きく変わってきた。現在の学生、生徒はパソコンの中の仕組みに興味は無い。彼らにとってパソコンは遊園地の中の遊具と同じに感じている。彼らはアメーバのように存在する情報にランダムにアクセスする。ITの活用方法はドリル形式から伝達、共同作業等に変わってくる。Podcast だけで授業はできない。これは通常の授業を補完するものであると考える。」

続いて、iTunes U でおなじみのデューク大学で日本語を教えていらっしゃる遠藤仁美先生から、日本語コースで iPod を活用した実践報告をしていただいた。



「2007年の春学期から iPod の使用を始め、今学期で3学期目が経過した。デューク大学では、2004年にテクノロジーの教育への導入を推進する DDI (The Duke Digital Initiative, <http://cit.duke.edu/help/ddi/index.html>) というプログラムが発足し、デジタルテクノロジーが如何に教育分野で活用・応用できるか、様々な試みを行っている。実際に実務を取り仕切っているのは CIT (The Duke Center for Instructional Technology, <http://cit.duke.edu/>) という機関で、教師陣の教育テクノロジーの活用・応用を強力に支援する。DDI があっても CIT が無ければ、教師陣が授業でテクノロジーを使うということは無理である。

学生は、教科書教材の聞き取りや練習、宿題、個人セッション (TA との自由会話) と練習、スピーチ、スキットのファイルの送付・練習などの他、語彙練習用のデジタルフラッシュカードとして活用している。ほかに口頭試験のレビューや映像を使っのプレゼンテーション、ディベートの録音・自己評価、ラジオドラマの制作・音声ファイルの送付などにも活用している。教師による iPod の使用としては、デジタル教材の作成・アップロード、運用能力のモニターなどに使われている。学習支援ツールとしての iPod は、多様な活用の可能性があり非常に有効だったと評価している。」

佐藤 祈先生からは、地方のごく小さな学校の子供たちと一体となって、iPod や教育テクノロジーを活用している様子が報告された。



「現在、先生は様々な取り組みをしている。そうした中で iPod や教育テクノロジーを活用している。学校では記録として一年間に 20,000 枚の写真を撮るが、これらの写真を iPod に入れてテレビに出力する機材として適当と考え、購入した。

学校評価、学校説明会の情報等は Keynote のグラフ機能を使い、臨場感のあるものを作り、iPod に入れ TV に写して親にプレゼンテーションした。他に学校行事の様子等も写真や

映像を交えたコンテンツを iPod で紹介した。新幌内小学校で社会科や総合学習の授業で iPod や教育テクノロジーを活用している。社会科では簡単に映像をコンピューターに取り込める Xacti を使い、小学校のニュース制作を行っている。教科書に出てきた沖縄県・竹富町の小学校とも映像などを介した交流を行った。竹富では 2 月 14 日に田植えがあったが、その頃三笠では交通安全を祈念した雪だるまを作っていた。この映像交流は子供たちに非常に大きな印象を与えた。iPod はそれほど敷居が高くないので様々な利用できると感じている。」

曾我 (北海道文教大学) からは大学環境における Podcast の具体的な方法について報告があった。授業に参加できなかった学生の補助教材として Podcast 配信を行うために、授業映像を一人で撮影するための自動追尾回転台や、簡単に Podcast 配信を行うソフトウェア、映像配信に最適な H.264 カメラの事例紹介があった。



その後、アップルジャパン社によるハンズオンセッションが行われた。今回は、一人一台ずつの Mac を準備するなど、恵まれた環境の中で、Podcast コンテンツの作成と Web 配信の方法について体験した。



(文責：曾我 聡起)

2008PC カンファレンス

《開催報告》

2008PC カンファレンスは8月6日(水)～8日(金)の3日間、慶應大学湘南藤沢キャンパスで開催され、800名を越える参加者を得て盛会のうちに終了致しました。

1. 開催概要

- (1) 開催日時 2008年8月6日(水)～8日(金)
- (2) 開催場所 慶應義塾大学 湘南藤沢キャンパス (神奈川県藤沢市遠藤5322)
- (3) 開催テーマ 創発する学び
- (4) 主催 CIEC (コンピュータ利用教育協議会) 全国大学生生活協同組合連合会

(5) 後援
慶應義塾大学, 文部科学省, 神奈川県教育委員会, 藤沢市教育委員会, 神奈川新聞社, テレビ神奈川, 社団法人私立大学情報教育協会, 社団法人日本工業英語協会, 日本教育工学会, 社団法人情報処理学会

- (6) 実行委員会
 名誉実行委員長 安西 祐一郎 慶應義塾塾長
 実行委員長 熊坂 賢次 慶應義塾大学 環境情報学部
 副実行委員長 佐伯 胖 CIEC 会長 (青山学院大学)
 副実行委員長 妹尾 堅一郎 CIEC 副会長 (東京大学)

2. 各企画報告

プレカンファレンス 44名

実施日時 8月5日(水) 13:00～15:30
 開催場所 ε (イプシロン) 館
 「いつでもどこでもモバイル学習-Podcast Producerによる環境構築と教材コンテンツ作成-」

全体会 約300名

実施日時 8月6日(水) 10:00～10:20
 開催場所 θ (シータ) 館
 開会挨拶 熊坂 賢次 慶應義塾大学 環境情報学部 (2008PC カンファレンス実行委員長)
 開催校挨拶 村井 純 慶應義塾常任理事
 来賓挨拶 坂口 昭一郎 文部科学省高等教育局専門教育課企画官
 中島 栄一 神奈川県教育委員会副教育局長
 司会 長谷部 葉子 慶應義塾大学環境情報学部

基調講演 約380名

実施日時 8月6日(水) 10:20～12:00
 開催場所 θ (シータ) 館
 司会 長谷部 葉子 慶應義塾大学環境情報学部
 基調講演 1: 学習学ことはじめ～勉強から学びと共感へ～
 佐伯 胖 青山学院大学社会情報学部教授
 基調講演 2: SFCの挑戦: 「未来からの留学生」から未来創造塾へ
 熊坂 賢次 慶應義塾大学環境情報学部教授

シンポジウム 1 約270名

実施日時 8月6日(水) 14:10～16:15
 開催場所 θ (シータ) 館

テーマ 「プロジェクトを通じた学びとメディア環境」
 パネリスト 北村 士朗 (熊本大学大学院)
 熊坂 賢次 (慶應義塾大学)
 長岡 健 (産業能率大学)
 松澤 芳昭 (静岡大学)
 司会: 妹尾 堅一郎 (東京大学 CIEC 副会長)

シンポジウム 2 約110名

実施日時 8月6日(水) 14:10～16:15
 開催場所 ι (イオタ) 館 23
 テーマ 「構成主義による情報教育」

パネリスト 齋藤 俊則 (日本教育大学院大学)
 戸塚 滝登 (作家, 早稲田大学こどもメディア研究所客員研究員)
 本村 康哲 (関西大学)
 山崎 謙介 (東京学芸大学附属竹早中学校)
 司会: 武沢 護 (早稲田大学高等学院/大学院教職研究科)



シンポジウム 3 約170名

実施日時 8月7日(木) 9:30～11:30
 開催場所 Ω (オメガ) 館 11
 テーマ 「ケータイとモバイルがもたらす新しい学習環境」

パネリスト 加藤 文俊 (慶應義塾大学)
 坂本 憲志 (アップルジャパン株式会社)
 武山 政直 (慶應義塾大学)
 司会: 若林 靖永 (京都大学)

シンポジウム 4 約100名

実施日時 8月7日(木) 9:30～11:30
 開催場所 Ω (オメガ) 館 12
 テーマ: 情報技術と日本語
 パネリスト 味岡 伸太郎 (デザイナー&アーティスト)
 岩崎 美紀子 (岩崎言語プログラム開発)
 笥 捷彦 (早稲田大学)
 片桐 ユズル (京都精華大学名誉教授)
 司会: 大岩 元 (帝京平成大)



分科会

分科会論文応募数: 116本 (昨年 173) 1本キャンセル
 口頭発表: 94本 ポスター発表: 21本

学生論文賞応募数：16本（学生論文発表は24本）

「論文賞」と「学生論文賞」の受賞者は下記のとおりです。

■最優秀論文賞

中学校の「総合的な学習の時間」を利用した防災教育のための教材の開発

○片山 貴文 兵庫県立大学 看護学部

岡元 行雄 兵庫県立大学 看護学部

神崎 初美 兵庫県立大学 地域ケア開発研究所

■優秀論文賞

SIEMを導入したオブジェクト指向プログラミング入門教育

○土肥 紳一 東京電機大学情報環境学部

宮川 治 東京電機大学情報環境学部

今野 紀子 東京電機大学情報環境学部

■優秀論文賞

学生主導型の情報系サポートシステム-学生同士で学び合う

「ラウンジ」活動-

○野村 林太郎 鳴門教育大学大学院学校教育研究科

永野 直 鳴門教育大学大学院学校教育研究科

林 秀彦 鳴門教育大学大学院学校教育研究科

■最優秀学生論文賞

記述式小テストの解答の途中経過を講師に提供するシステム

○今井 拓真 三重大学大学院工学研究科電気電子工学専攻

高野 敏明 三重大学大学院工学研究科電気電子工学専攻

森田 直樹 東海大学情報教育センター

高瀬 治彦 三重大学大学院工学研究科電気電子工学専攻

北 英彦 三重大学大学院工学研究科電気電子工学専攻

林 照峯 三重大学大学院工学研究科電気電子工学専攻

■優秀学生論文賞

授業における教材提示方式に関する研究

○宮本 穂乃香 東京電機大学大学院

矢口 博之 東京電機大学

IT (Information Technology) フェア

開催日時 8月6日(水)14:00~18:00

7日(木)10:00~18:00

開催場所 生協 south 食堂

56社 70ブースの出展がありました。

レセプション 370名

開催日時 8月7日(木)18:30~20:00

開催場所 生協 North 食堂

開会挨拶 眞田 隆裕(慶應義塾生活協同組合専務理事)

主催者挨拶 庄司 興吉(全国大学生協連会長理事)

妹尾 堅一郎(CIEC会長)

CIEC学会賞受賞者紹介

赤間 道夫(学会賞選考委員会副委員長)

分科会(論文賞/学生論文賞)受賞者紹介

宿久 洋(2008PCC実行委員分科会担当)

乾杯挨拶 熊坂 賢次(実行委員長 慶應義塾大学環境情報学部)

次期開催校挨拶 赤間 道夫(愛媛大学)

イブニングトーク 104名

開催日時 8月6日(水)18:30~20:00

開催場所 κ(カップ)館 ε(イブシロン)館

1. 授業法研究部会をつくりませんか? (19名)
2. 韓国の情報教育, さらにアジア諸国の情報教育に関心のある方 (5名)
3. 短期集中講習でタッチタイピングを習得!! (13名)
4. 英語教育におけるネットとPCの利用 (4名)
5. 初めてのmoodle体験 (13名)
6. 大学生協パソコン講座スタッフ交流会 (40名)
7. テキストベースのプログラミングの愉しみ (10名)

初めて参加された皆様へ 約120名

開催日時 8月6日(水)12:00~12:50

開催場所 ι(イオタ)館

はじめてPC Conferenceに参加された方やCIECにいろいろと提案(注文)をしてみたいと思っている方との交流。

担当:CIEC会長 副会長 理事

IT(Information Technology)フェアインデキシング 約250名

開催日時 8月6日(水)13:00~14:00

開催場所 θ(シータ)館

ITフェアに出展の各社が1分間アピールをする新企画。42社の参加があり好評でした。

CIECからのお知らせ

《2009PCカンファレンス》

2009PCカンファレンスは愛媛です！

開催日時 2009年8月9日(日)～11日(火)
 開催場所 愛媛大学

※2009PCC分科会レポート募集要項はE-mailでご案内いたします。
 郵送でのご案内はいたしませんので、CIECWebサイトをご覧ください。
 (12月末頃、公式サイトを公開予定です)

《PCカンファレンス北海道2008》

【テーマ】 情報技術を利用した教育におけるタテの絆
 【日時】 2008年11月15日(土)13:00～16日(日)12:45
 【会場】 室蘭工業大学 大学会館 (北海道室蘭市水元町27-1)
 公式サイトはこちら
<http://www.hokkaido.seikyou.ne.jp/pcch/2008/>

《2008PCカンファレンス九州in佐賀大学》

【テーマ】 eラーニングで変わる学校教育～小学校から大学教育まで～
 【日時】 2008年11月22日(土)13:00～23日(日)12:00
 【会場】 佐賀大学 理工学部 低平地研究センター, 大学院棟 (佐賀市本庄町1番地)
 公式サイトはこちら
http://kyushu.seikyou.ne.jp/scoop/news/pc_conference.html



《CIEC 活動日誌》

2008.4. 1(火)	分科会論文受付開始
26(土)	北海道PCC実行委員会
30(水)	学会賞〆切
5. 1(木)	内部監査
13(火)	監事会
25(日)	三役会議
31(土)	分科会論文応募〆切
6. 1(日)	2007年度第3回運営委員会
2(月)	選挙管理委員任命
5(木)	選挙管理委員会
7(土)	北海道PCC実行委員会
8(日)	2008PCC論文採否、時間割編成会議
9(月)	選挙公示
16(月)	理事立候補受付開始
17(火)	生協職員部会世話人会
21(土)	小中高部会世話人会
22(日)	PCCプログラム委員会
〃	CIEC第75回研究会
23(月)	理事立候補締切
7. 1(火)	2008定例総会・選挙資料送付
5(土)	CIEC第76回研究会
18(金)	投票締切
19(土)	選挙管理委員会開票
〃	北海道第2回研究会
8. 6(水)	2008PCC
7(木)	2008PCC
8(金)	2008PCC